

<講演記録・第11回酒史学会大会>
2012年11月17日

日本ウイスキー 90年の歴史

河井敬司¹

要 旨

わが国に初めて本格的なウイスキーが誕生したのは1929年（昭和4年）、京都郊外の山崎の地であった。日本ウイスキーが誕生して今年で、83年。日本のウイスキー製造の黎明期に国産ウイスキーを造ろうとした人々の姿を中心に、約90年間の日本ウイスキーの歴史を振り返る。

キーワード：日本ウイスキー

90 years history of Japanese Whiskey

Keiji Kawai¹

Abstract

In 1929, the first Japanese whiskey was born in suburb Kyoto, Yamazaki. 83 years have spent from the birthday of the Japanese whiskey. In the early times, many people tried hard to make the Japanese whiskey. We will remember the history focus on the frontiers.

Keywords: Japanese Whiskey

1. 最初にウイスキーを飲んだ日本人

1853年（嘉永6年）ペリー提督率いる米国海軍の東インド艦隊4隻が浦賀に来航し、浦賀の与力、香山栄左衛門、中島三郎助らが船上で歓待を受け、ウイスキーを飲んだという記録がある。「自由に飲み、食い、ウイスキーとブランデーが特に好きらしかった」と書かれている。しかしそれをさかのぼること1ヶ月。ペリーは浦賀に来る前に、琉球に立ち寄っている。琉球の執政になった尚宏勲（シャン・ハン・ヒュン）をサスクエハンナ号の提督室に招待し、フランス、イギリスの葡萄酒、スコットランド、アメリカのウイスキー、マディラ酒、シェリー酒、マラスキーノで香り付けしたオランダジン等、世界のあらゆる洋酒を味わわせた¹⁾。琉球を日本に含めると、最初にウイスキーを飲んだ日本人はこの琉球の交渉団一行ということになる。ペリーが持ってきたスコッチは、まだブレンディッドウイスキー発明前なので、おそらくモルトウイスキーであっただろうと思われる²⁾。

2. 輸入品から模造ウイスキーへ

日本にウイスキーが初めて輸入されたのは、1871年

（明治4年）である。横浜山下町のイギリス商館、カルノー商会が「猫印」という今では銘柄不明のウイスキーを取り扱っていた。1870年（明治3年）以降ジンやブランデー、ラム、キュラソーなどの洋酒が輸入されるようになったが、“猫印ウイスキー”が輸入されたと同じ年、東京京橋区竹川町の薬種商、滝口倉吉が国内においてリキュールの製造を始めている。これを皮切りにリキュール、ウイスキー、ブランデー等の模造洋酒が中小の薬種商の手で続々と作られるようになった。この当時の模造洋酒はアルコールに砂糖や香料などで味付けをしたものであった。

当時、アルコールは関税が安くて1ポンドあたり6銭5厘にしかならず、模造洋酒の製造販売は大変有利な商売であった。しかし明治32年に条約が改正されて輸入税が増え、さらに明治34年改正酒税法、酒精及び酒精含有飲料税法が公布されて、採算性が悪化し、模造洋酒の製造は国産の大手アルコールメーカーの手に移っていった。当時の大手アルコールメーカーには、神谷酒造株式会社、摂津酒精醸造所、大日本製薬株式会社等があった³⁾。

¹ ニッカウキスキー株式会社、〒277-0033 千葉県柏市増尾字松山967番地

The Nikka Whisky Distilling Co., Ltd., 967 Matsuyama, Masuo, Kashiwa, Chiba 277-0033, Japan

3. 赤玉ポートワインの成功

1876年(明治9年)大阪道修町で酒精製造を始めた薬種商、小西儀助商店に丁稚として入り、苦勞を重ねて1899年(明治32年)に独立したのが、鳥井信治郎であった。彼は鳥井商店を開業し、葡萄酒の製造を始めた。これが後の「壽屋洋酒店」(現：サントリーホールディングス株式会社)である。日露戦争の頃(1904年)、日本で一番売れていたのは神谷酒造の「蜂印香竄(ざん)葡萄酒」であったが、信治郎はこれに対抗し独自の調査をした「赤玉ポートワイン」を1907年(明治40年)に発売した。この頃、葡萄酒はもっぱら薬用酒として販売されており、赤玉ポートワインも薬用酒をうたっていた。1本38銭、米4升が買えるほどの贅沢品であったが、信治郎の広告の才とあいまって、次第に売上げを伸ばしていった⁴⁾。

壽屋洋酒店は1911年(明治44年)ヘルメスウイスキーを発売したがこれは模造ウイスキーであった。模造洋用のアルコールを樽に入れておくとまるやかになっていることを発見し、これを1919年(大正8年)「トリスウイスキー」として発売したが、在庫がなくなると終売せざるを得なかった。しかしこのことで、鳥井氏は“樽に貯蔵することで酒がまるやかになる”ということを実感して、本格ウイスキーへの思いが生じたのかもしれない。

4. 本格モルトウイスキー造りへの挑戦

1916年(大正5年)、アルコール製造大手の1つであった摂津酒造に一人の学生が訪れた。大阪高等工業学校(現在の大阪大学)醸造科の卒業を控えた竹鶴政孝であった。実家が広島県竹原の造り酒屋で、12月の徴兵検査までの間、洋酒の造り方を勉強したいと思い、大阪高工の先輩である岩井喜一郎が常務を務める摂津酒造に飛び込みで面会を求めたのであった。岩井が社長の阿部喜兵衛の元へ連れて行ったところ、阿部社長は、「明日からでも入社しなさい」と即答で入社を許可したのであった。政孝は模造とはいえ、洋酒作りに没頭した。ロンドンのブッシュ社から出ているレシピ本を元に調査を学んでいった。その働きぶりを認められ入社間もないのに洋酒関係の主任に抜擢された。

徴兵検査では、柔道で鍛えた体躯の政孝は文句無く合格で、審査官は甲種の印を取りかけたが、書類を見返し、アルコール製造技師であることに気づいて乙種の印に持ち換えた。政孝が兵役につかなくても良くなったことを阿部社長は喜び、しばらくしたある日「我が社のウイスキーは今売れているが、いつまでも模造の時代ではない。本格的な品質の良いウイスキーを作りたい。君、ひとつスコットランドに行って本場のウイスキー造りを勉強してきてくれないか」と政孝に言った。

1918年(大正7年)6月、政孝は神戸港から天洋丸に乗り、サンフランシスコに向けて旅立った。見送りのな

かには、壽屋洋酒店の鳥井信治郎氏や、後に朝日麦酒の社長となる日本製塩の山本為三郎氏の顔もあった。

アメリカ経由で単身スコットランドに渡った政孝の手元には、英文の大阪高工の卒業証書しかなかった。ウイスキー製造に関して何のつても無い状態で、まず政孝はグラスゴー大学、ロイヤル工科大学の聴講生となった。大学の講義そのものはすでに日本で学んだことだったので、ウイスキーの文献を図書館で勉強する毎日であった。ロイヤル工科大学のウィルソン教授は、各方面に打診し実習の受け入れ先を探してくれ、また政孝に「The Manufacture of Whisky and Plain Spirit」という一冊の図書を紹介してくれた。政孝はこの本を翻訳して勉強を始めたが、実習をしていないので書かれている用語等の意味がわからず苦しんでいた。本には「苦シイ洋行ダナー。何一つホントーニ、ロクナ事ハナイ。頭ニハイラス、ヤケダ、イヤイヤ心棒セヨ」などと走り書きし、自分を諷めた。日本人が誰もいない地で思うように進まないウイスキー造りの研修。夜な夜な日本に帰る夢をみて、母親から「志半ばで日本に帰ってくるとは何事ですか？スコットランドに戻りなさい」と諭される夢にうなされ、朝起きると枕が涙に濡れていたこともあった。

スコットランドの地図を頼りに、蒸溜所を尋ね歩き、ロングモーン・グレンリベット蒸溜所が数日間の実習を許してくれた⁵⁾。ここで始めて政孝は、ウイスキー造りの糖化から発酵、蒸溜という一通りの工程を体験した。政孝を快く受け入れてくれたグラント工場長は「ウイスキー造りの勉強はゴルフと同じで、本を読んだだけ見ただけでは絶対にだめだ。身体で覚えるものだ」という主義の持ち主であった。政孝は、麦芽乾燥炉(キルン塔)の中で暑さと煙にまみれてシャベルで麦をひっくり返す仕事や、蒸溜を終えた釜の中の掃除など人の嫌がる仕事を進んで引受け、ウイスキー造りを肌身で体験し、学問の世界とは全く反対の経験と勘を必要とする職工の感覚を身につけることができた。ロングモーン蒸溜所以外にも、グレンジラント、グレンスペイ、グレンローゼスなどの蒸溜所にもよく顔を出し従業員同様の扱いをされるほど職工達と仲良くなった。ローゼスには大正7年11月から9年の5月まで滞在した。夏の気温が上がるシーズンには蒸溜所の操業が止まるのでフランスやイタリアのワイン醸造地を巡った。

5. リタとの出会い

政孝はこのスコットランド在住の際に一人の女性とめぐり会った。ウイスキー造りを学んで帰るのは無理なのではないかと心が折れそうであった政孝を支えてくれたのは、ジェシー・ロベルタ・カウン、愛称「リタ」と呼ばれたスコットランド女性であった。グラスゴー大学で学友であったリタの妹から自宅に招待されたのがきっかけで知りあった。ウイスキー造りを学ぶために一人でスコットランドで勉強する政孝の苦悩などを聞き、最初は

同情の思いであったが、その同情がロマンスに進んでいった。クリスマスには、政孝はカウン家のパーティに招待された。クリスマスプディングの言い伝え——というものがある。クリスマスプディングの中に新しい6ペンス銀貨と裁縫に使う指貫を入れて、男性に6ペンス銀貨が当たると大金持ちに、女性に指貫が当たるといいお嫁さんに、そして男性が6ペンス銀貨を、女性が指貫を当てると二人は将来結ばれるというものであった。このクリスマスパーティでリタは指貫を、政孝は6ペンス銀貨を当てた。お互い意識していた時期なので、その運命を感じたのではないかと思う。

政孝はロッホローモンドの湖畔でリタにプロポーズをした。リタを深く愛し、リタが望むのであれば日本での本格ウイスキー造りをあきらめてスコットランドに残ってもいいと言った。それに対しリタは「政孝さんには大きな夢がある。私たちは日本に行くべきだ」と答えた。リタは身体が弱く、10代の頃は学校も休みがちであった。また父親を亡くしてまだ1年ぐらしか経っていないような状況の中で、リタは政孝の夢のために、地図でしか見たことのない極東の島国へ行く決心をしたのであった。親、親族に祝福されての結婚ではなかったので、登記所に届けるだけのイレギュラーマリッジと呼ばれる方法であった。

6. グレーンウイスキー蒸溜所の実習

政孝はさらに、是が非でも経験したかったグレーンウイスキー用のカフェ式連続蒸溜機の製造実習の機会を得た。訪れたのはエジンバラ近くのボーンズという街にあったジョニーウォーカー系のジェームス・カルダー社の工場であった。「この三週間に実習はほとんど死に物狂いで、朝から晩まで隅から隅と、それぞれの職人に質問して回ったのですが、鼓膜を破るような歯車の音や蒸気管の音は会話を妨げ、その上職人の話は訛が多くて、たとえばナイト(夜)をニヒトと発音するというさまで、二週間目にはもう咽喉が痛み、神経は衰弱してきました」また、「多くの技師が見ているところで機械のスケッチをとることもできず、宿に帰っておぼえ書きをする有様だった」と当時の日記に書かれている。ウイスキー業界はDCL(後のUD、その後ギネスと合併し現在ディアジオ)という企業グループによる合併統合が進んでいた時代であり、外部の人間に対する警戒心が強く、なかなか機械に手を触れることはできなかった。やがて実習期限が迫った頃、蒸溜主任のおじいさんが自分の夜勤のときに政孝を呼び寄せ、バルブの開け具合を手を取って教えてくれた。おじいさんは「お前、日本に帰ったら、必ずいいウイスキーをつくれよ。一生懸命やれば、なんでもできるのだ。オレも祈っているから」と励ましてくれた。政孝がニッカ西宮工場にカフェ式連続蒸溜機を導入し、最初のバルブ開けを自身の手で行ったときに、45年前にあのおじいさんに習ったことがいま初めて役に立つの

だと感慨無量であったと言っている⁶⁾。

7. 最後の実習へ

さらに政孝は、キャンベルタウンのヘーゼルバーン蒸溜所の工場長イネー博士の下で三ヶ月間学んだ。ウィルソン教授の親友でもあったイネー博士はスコッチウイスキー界の権威の一人で、ブレンダーとしてもその名が知られていた。ここではローゼスで受けた職人的指導とは反対に、学問的な研究とブレンドの訓練を行った。政孝は「それにより体験と勉強を学問的、体系的に整理でき、ウイスキー製造について開眼できたのはイネー博士に負うところすこぶる大である。」と語っている。後に日本で製造したウイスキー原酒を政孝がイネー博士のところへ持っていった時、イネー博士は何度も原酒を嗅いだり口に含んだりして、「よくやった」と言ったそうである。

政孝は阿部社長に報告するため、さまざまな困難を乗り越え学んだことを、克明に二冊のノートにまとめた。このノートが日本でウイスキーを作るときの基礎となった。製造方法のみならず、勤務体系や給与、働く姿勢にまでその筆は及んでいる。

8. 国産ウイスキー誕生

1920年(大正9年)11月、政孝は横浜港に帰ってきた。約2年半ぶりに日本の土を踏んだのであった。さっそく国内でウイスキー造りを計画するが、会社の景気も日本の空気もスコットランドに向かった頃とは一変していた。第一次世界大戦後の恐慌で、日本は不況のさなかにあった。

とにかく摂津酒造の敷地内に小さなポットスチルだけでも設置する計画を立て、計画書を作成した。政孝を派遣した摂津酒造の阿部社長は「竹鶴君が苦勞して勉強してきたのだから、なんとかやらせてみたい」と努力したが経営会議で全役員から反対され、断念せざるを得なかった。摂津酒造には、恐慌のさなかに何年もかかるようなウイスキー事業に投資する体力は残っていなかった。政孝は本格ウイスキーをつくれぬのなら「高禄をはむ意味は無い」として、さんざん悩み考えた末に阿部社長に思いを述べ、しばらく浪人してみたいと思いますと辞表を提出した。スコットランドから帰国して2年後のことであった。一生の仕事としてウイスキー造りの道を開いてくれた阿部社長への思いは特別なものがあった。スコットランドでのウイスキー造りの実習は、阿部社長の「日本で本格ウイスキーをつくりたい」という思いがあったからこそ実現できたことであった。それらを考えると阿部社長と別れることはとてもつらいことであった。

政孝は摂津酒造を退社後、大阪の桃山中学校で化学の教師をして浪人生活を送った。リタも英語の教師やピアノを教えたりして、政孝を支えた。政孝は「ウイスキーは元来、英国以外ではできないとされている時に、七年

以上も資本を死蔵せしめる資本家が発見できるか」と不安に感じていた⁷⁾。そんな時、政孝のもとを訪れたのが壽屋の鳥井信治郎であった。その頃、鳥井氏も模造ウイスキーから脱却したいと考えていた。鳥井氏は重役会議で、本格ウイスキーをつくりたいと訴えるが、重役達は反対した。それに対し「わしには赤玉ポートワインという米のメシがあるよって、このウイスキーには儲からんでも金をつぎこむんや。自分の仕事が大きくなるか小さいままで終わるか、やってみんことにはわかりまへんやろ」と反対する人々を説き伏せた⁸⁾。商社を通じてイギリスに技師派遣を要請したところ「日本にはこちらで技術を学んでいった竹鶴という男がいるではないか」との返事があった。鳥井氏は政孝を訪ね、三顧の礼の言葉通り、三度政孝を訪問した。政孝が壽屋に入る条件として、ウイスキーづくりは全部まかせる、必要な金は用意する、十年間働く、年俸4千円という約束が二人の間にできた。年俸の4千円は、スコットランドから技師を招聘する予定だったものであった。当時大学卒業生の初任給が月給で40～50円であったので、破格の待遇であった。1923年（大正12年）6月、政孝は壽屋に入社した。場所の選定、設備の設計、原料の手配、生産計画、技師・職工の育成などやらなければならないことは山ほどあった。

まずは場所の選定である。この時、政孝はウイスキーづくりの理想郷である北海道での工場建設を進言したが、鳥井社長は「工場を皆さんに見てもらえないような商品は、これから大きくなりまへん。大阪から近いところにどうしても建てたいのや」と言ったため、大阪近郊で探すことになった。政孝は「鳥井さんの商品を育てるカンと努力は先天的なものがあつたが、このときもその好例であろう」と言っている⁹⁾。場所探しは、佃、小林（おばやし）、吹田、枚方、山崎など候補地を絞り、水質の点から山崎の地に決定した。

起工式は1924年（大正13年）4月であった。ウイスキー造りの心臓部ともいえる巨大なポットスチルは大阪の渡辺銅工所に依頼した。できたポットスチルを運ぶのが一苦勞であった。大阪から川を遡って運ぶのだが途中に東海道線があつて、汽車の間隔が一番長い夜中を選んで、コロを使って線路を越えた。

1924年（大正13年）11月11日、ここに日本で最初のモルトウイスキー蒸溜所が誕生した。竣工式は関係者や特約店、新聞社を招いて盛大に行われた。この工場建設には二百万円あまりの費用がかかったといわれている。当時の二百万円は今では十数億円に相当する金額であった。

工場は1924年（大正13年）秋から蒸溜を始めたが、原料がどんどん運び込まれるだけで、品物がまったく出て行かないので、付近の住民達はみな首を傾げていた。ウイスキーなど知らない出入りの商人は請求書の宛名に「ウスケ様」と書いてくる始末であった。工場の正社員は工場長の竹鶴と事務担当の二人だけ。壽屋の社内では

山崎工場は道楽息子のように思われていて、事務担当者は、本社に支払いの依頼をしたり、金を貰いにいくたび小さくなって辛い思いをしていた。

大正末期から昭和初期にかけて日本は不況のどん底であった。昭和2年には金融恐慌が起こり、休業する銀行が続出した。しかし1929年（昭和4年）はカフェーの全盛期で東京都内だけでカフェーが6,187店、バーが1,345店もあり、この頃のビールや模造洋酒業界の競争は激しいものであった。

1929年（昭和4年）日本発の本格ウイスキー「サントリー白札」が世に出た。ジョニー・ウォーカーの赤が5円のところに4円50銭の強気の値段をつけた。その新聞広告では「あはれ東海日出づる國に、今し万人渴仰の美酒 サントリーは生まれぬ…」という格調高い文章で始まり、「わが醸造界に一新紀元を劃しえたるのみにはあらず…」と続いている⁴⁾。まさに日本のウイスキーの歴史に画期的な出来事であった。しかしながら、鳥井氏や政孝の期待に反して売れ行きは芳しくなかった。

まだ貯蔵5年なので理想的なブレンドができなかったこともあるが、コゲ臭い、煙臭いといわれ、酒といえは清酒やビールしか知らない人々には、ウイスキーのビートの香りは異臭でしかなかったのであった。翌年の1930年（昭和5年）に普及品の「サントリー赤札」を、1932年（昭和7年）に「サントリー特角」を出したが、これらも思うように売れなかった。

ウイスキーは売れなくても仕込みは続けなければならないので、経理部門からは悲鳴が上がった。サントリーのウイスキー貯蔵庫には「1931年（昭和6年）」の年号の樽が無いのは、この年ついに資金が底をついてウイスキー原酒の仕込ができなかったからである⁴⁾。「日本人にいかにかウイスキーになじんでもらうか」鳥井氏は研究と改良を続けながら、料亭の宴会などにウイスキーを持参しては、客に注いでまわって意見を聞き、宣伝にも努めた。

ウイスキーが思うように売れないまま、契約期間の10年が過ぎ、兼任していたビール事業で齟齬が生じたこともあり、政孝は1934年（昭和9年）3月壽屋を退社した。これについて政孝は「鳥井さんとはけんか別れではなく円満に退社したのである。もともと契約は10年の約束であつたし、私はつねづね自分でウイスキーづくりをしたいと思っていたので、その期限の来た昭和7年に退社したいと申し入れたが保留されていたのだ」と、「あの清酒保護の時代に、鳥井さんなしには民間人の力でウイスキーが育たなかつただらうと思う。そしてまた鳥井さんなしには私のウイスキー人生も考えられないのはいうまでもない」と述べている⁹⁾。

9. 竹鶴、理想のウイスキーの地へ

1934年（昭和9年）政孝は北海道を視察し、加賀正太郎、芝川又四郎、柳沢保恵伯爵、竹鶴政孝の4名を株

主として7月2日に資本金10万円で北海道余市に大日本果汁株式会社を設立した。当初からウイスキー製造に取りかかるには、資金のうえでも製造体制のうえでも力不足なので、ウイスキーが熟成するまでリンゴジュースを売って運転資金にしようと考えたのである。しかし肝心のリンゴジュースの売れ行きが芳しくなかった。リンゴのペクチンが固まり、濁りが出たとの連絡を受ければ汽車に飛び乗って保健所に説明に行き、またひどいときは回収させられたりもした。一部の病院ではニッカのリンゴジュースを扱ってくれるところもあったが、販売量は少なくアップルゼリーやアップルソース、アップルワインなども作ってなんとかしのいでいた。

大日本果汁設立と同じ年、大黒葡萄酒（現メルシャン株式会社）が設立された。この頃バーの全盛期となり、銀座ではその数が500軒に達した。世の中は軍閥が実権を握り、戦争への道を進んでいたが、一般の人々はまだ平和な空気の中にいた。1937年、寿屋は12年ものの角瓶を発売した。今に続く「サントリー角瓶」である。同じ年、東京醸造も「トミーウイスキー」を発売した。同年、盧溝橋事件が起こり、日本は戦争に突入した。戦争に入るとウイスキーの輸入は激減し、国産ウイスキーが人気を博するようになった。

政孝はリンゴジュースでなんとか会社をささえながら、設立から6年目の1940年（昭和15年）ようやく第1号ウイスキーを発売した。政孝がスコットランド留学から帰国してすでに20年がたっていた。初出荷のときには全従業員が並んで、ウイスキーが積まれた馬車を見送った。価格は戦後で千三百五十円という高額であった。

ニッカ1号ウイスキー発売から二ヶ月後、物価統制令が施行され、ウイスキーにも公定価格が設けられるようになった。また、一級、二級、三級に等級分けが行われ、寿屋の「サントリー」、東京醸造の「トミー」、「ニッカウキスキー」の3つが一級ウイスキーの指定銘柄品として公示され、余市工場は海軍の監督工場に指定された。

このことで戦争の間であっても原料を確保し、原酒の製造を継続することができたことが、後の発展に結びついていく。

10. 戦後の混乱期を抜けて

終戦後、カストリ、バクダンといわれる危険な密造酒が世の中に横行した。いち早く寿屋は三級のトリスウイスキーを終戦の翌年に発売した。その後は、酒類配給公団の解散、雑酒の公定価格廃止と洋酒業界はやや正常な方向に向かったが、数多くの模造ウイスキーが出回る時代が続いた。当時の税法では、三級ウイスキーは“原酒が5%以下、ゼロ%まで入っているもの”と規定されていた。ゼロ%つまり、ウイスキー原酒が一滴も入ってなくても、税金さえ払えばウイスキーとして通用したのである。朝鮮動乱の景気で街中にはバーが雨後のタケノコのようにできた。1950年（昭和25年）寿屋は「オー

ルド」を発売した。

原料配給がなくなり公定価格が廃止されたことにより、一級ウイスキーしか作っていなかった大日本果汁は、三級ウイスキーに押され、売れ行きがガタ落ちとなった。しかしウイスキーは原料の大麦を買い入れ仕込みを続けることが宿命である。借金がますます膨らむ状態であった。他のメーカーに原酒を売ったりしたが一時しのぎにしかならず、インフレで従業員の給料も上がり、税金も滞納しがちとなった。初代国税庁長官の高橋衛は「あなたの理想はわかるが、今の日本は三級ウイスキーの時代ではないか。せつかく原酒を持ちながら、ニッカに万が一のことがあれば監督官庁の我々も困る」といわれ、につきもさつきも行かなくなり、全従業員を工場の広場に集めて、本格ウイスキーに命をかけた自分がブレンダーとしての良心に反し、三級ウイスキーを作らざるを得ないこと、しかし税法で許される上限の5%一杯まで原酒を入れることを伝えた。従業員は皆、涙ながらに聞いていた⁹⁾。

1950年（昭和25年）「ニッカポケット壺ウイスキー」、1951年（昭和26年）「ニッカ新角ウイスキー」の三級ウイスキーを発売した。これによりニッカは伸びるには伸びたが経営を好転させるまではいかなかった。

11. 第一次ウイスキーブーム到来

1953年（昭和28年）、ウイスキーは特級、一級、二級の級別となり、ウイスキー税率が引き下げられた。この頃、洋酒各社の販売合戦が盛んに行われ、ウイスキー消費量が激増した一方、トミーウイスキーを出していた東京醸造は経営不振に陥り、倒産した。ニッカもウイスキー消費の伸びに乗り切れず、銀行にも融資して貰えず、酒税の支払いもできない状態であった。政孝はこの頃が一番苦しかったと言っている⁶⁾。

株主であった加賀正太郎氏は癌が悪化し、ニッカの行く末を案じていた。加賀氏は芝川氏と相談して、二人の株を合わせて60%の株を山本為三郎氏の朝日麦酒に売ったのであった。しかも山本氏は政孝に、「私は株を持っているが、経営はあなたに任せる」と言い、また「営業に詳しい格好の人物を紹介するから」と言った。それが彌谷醇平であった。

1955年（昭和30年）から神武景気が始まり、この頃、第一次ウイスキーブームが到来し、トリスなどのチェンバーが続々と出現した。大黒葡萄酒も軽井沢に蒸溜所を建設した¹¹⁾。

ニッカの売れ行きが悪いのは、他社に比べて値段が高いからであった。政孝は三級ウイスキーでも原酒混和率5%を引き下げることとして認めなかった。彌谷氏は「500ml、350円で売っているものを、他社と同じ640ml、340円で売ると1本当たり3割の欠損になる。しかし全国的に87%伸びれば欠損は黒字に転化する。これはニッカがいつかは越えるべき“デッドライン”である」と言って政孝を説得した¹⁰⁾。1956年（昭和31年）

640ml, 340 円の「丸壘ウキスキー」通称“丸壘ニッキー”を発売した。丸壘ニッキーは洋酒ブームに乗って売れ、「オーシャン」を抜いて寿屋の「トリス」に次ぐようになり、ようやく全国商品として通用するようになった。

1961 年（昭和 36 年）、病気がちだったリタ夫人が亡くなった。日本に来てから苦労続きで、戦争の際には、特高警察に尾行されスパイの疑いまで持たれていたことがあった。「この目や髪が黒かったらよかったのに、私は日本人になりたい」といい、日本髪を結ったり、漬物の漬け方を習ったりして日本人以上に日本人になろうとされていた。丸壘ニッキーでようやく会社が安定して、これからリタに楽をさせてやれると思っていた政孝の悲しみは大きく、葬儀が終わるまで部屋に閉じこもりっきりで出てこなかった。政孝が墓石の裏に刻ませた文字がある。“IN LOVING MEMORY OF RITA TAKETSURU”（竹鶴リタのいとおいしい思い出とともに）…「リタほど、日本人になりきった外国人も少ないと思う」と政孝は言っている。

12. 第二次ウイスキーブーム

1960 年（昭和 35 年）頃には、第一次ウイスキーブームも陰りが見えるようになり、二級ウイスキーの伸び悩みは著しかった。生活に余裕が出るに従い、消費者の舌はより高品質のものを求めるようになった。

1962 年（昭和 37 年）、サントリー創業者 鳥井信治郎氏が亡くなった。社長を佐治敬三氏に譲り、会長になった翌年であった。鳥井氏はウイスキーのみならず、ワイン、ビール、リキュール等、洋酒を飲むというスタイルを日本にもたらした先駆者であり、その功績は日本の洋酒界にとって図り知れないものがある。

ウイスキー業界はウイスキーの品質向上のために大蔵省に二級ウイスキーの原酒混和率の引き上げを要望し、これを受けて 1962 年（昭和 37 年）酒税法が改正されることになった。酒税法改正を前にしたあるとき、朝日麦酒の山本社長は「いいよカフェ式蒸溜機を導入する時期ではないか」と政孝に話した。イギリスで見聞したカフェ式蒸溜機の見聞記を政孝に見せ、「今日の消費者の舌は進歩してきて、いいものはいとして識別できるようになった。余市でポットスチルは完成しているが、カフェ式グレーンを混ぜないと本格的な香りが出ない。これをやらなければスコッチに負けてしまうよ。金は出すから」と言った。政孝は一生涯自分の手では完成できないと思っていたカフェ式蒸溜機を日本に導入することができた⁶⁾。

カフェ式蒸溜機で蒸溜したカフェグレーンウイスキーを使用した 500 円の「ハイニッカ」が発売されたのが、1964 年（昭和 39 年）の 2 月であった。サントリーはすかさず 3 月に、同じ 500 円で「サントリーレッド（丸瓶）」を発売した。翌 1965 年（昭和 40 年）、ニッカはカフェグレーンウイスキーを使用した一級「ブラックニッカ」

を 1000 円で発売。サントリーも同年「ゴールドクレスト」を 1000 円で発売した。世の中は東京オリンピック後のいざなぎ景気の最中で、この矢継ぎ早の販売は、「500 円戦争」「1000 円戦争」「ソフトウイスキー合戦」と一部で騒がれたが、第二のウイスキーブームとして、ウイスキーの消費量は急激に伸びた。

1966 年（昭和 41 年）、ニッカを援助してくれた朝日麦酒の山本為三郎氏が亡くなった。山本氏の資金面の援助とカフェ式蒸溜機導入の先見の明がなければ今日のニッカはなかったであろう。

13. ウイスキー成長期

日本のウイスキーは日本経済の成長と共に伸びていった。各社積極的に設備投資をし、続々と工場を建設した。1969 年（昭和 44 年）、ニッカは仙台に宮城峡蒸溜所を、1973 年（昭和 48 年）キリンビール社（現キリンホールディングス株式会社）、JE シーグラム社（米、当時）、シーバースブラザーズ社（英）3 社合弁のキリン・シーグラム株式会社（現キリンディスティラリー株式会社）が富士山の麓に富士御殿場蒸溜所を建設した。同じ年、サントリーは山梨県に白州ディスティラリーを完成させ、生産量を増強した。そして各社新製品を次々に市場に投入していった。ウイスキーの課税移出数量を図 1 に示した。1964 年のハイニッカ、サントリーレッドの発売を契機に急激に右肩上がり伸びている。2 度のオイルショックも酒税法改正による値上げにも影響されず、1982 年までは順調に伸び、40 万 KL を目前にしていた。

1979 年（昭和 54 年）ニッカ創業者 竹鶴政孝が亡くなった。享年 85 歳。「日本人に本当のウイスキーを飲んで貰いたい」その一念に生きた人であった。

14. 焼酎ブームと級別廃止

順調に成長していた日本ウイスキーは 1983 年（昭和 58 年）を境に失速した。焼酎のブームが起きたのであった。酎ハイブームの先駆けを作ったのは、宝酒造から 1977 年（昭和 52 年）発売された「純」であった。焼酎をレモンと炭酸で割って飲むという新しいスタイルが受け入れられた。1984 年（昭和 59 年）の酒税法改正で再び洋酒の価格が引上げられ売れ行きが急落し、焼酎とウイスキーの課税移出数量は逆転した。さらに追討ちをかけるように 1989 年（平成元年）の酒税法改正ではついに級別が廃止され、二級ウイスキーは大増税となり、ウイスキーの課税移出数量は坂道を転がるように減少した。1991 年（平成 3 年）にはバブル経済が崩壊し、その後焼酎とウイスキーの税負担格差を無くす改正がたびたび行われたがウイスキー消費の回復はなかった。2003 年（平成 15 年）からは本格焼酎のブームが起き、焼酎ユーザーはさらに増えたが、ウイスキーの需要は広がらず、2007 年（平成 19 年）にはピーク時の 6 分の 1 にまで落ち込んだ¹¹⁾。（図 2 参照）

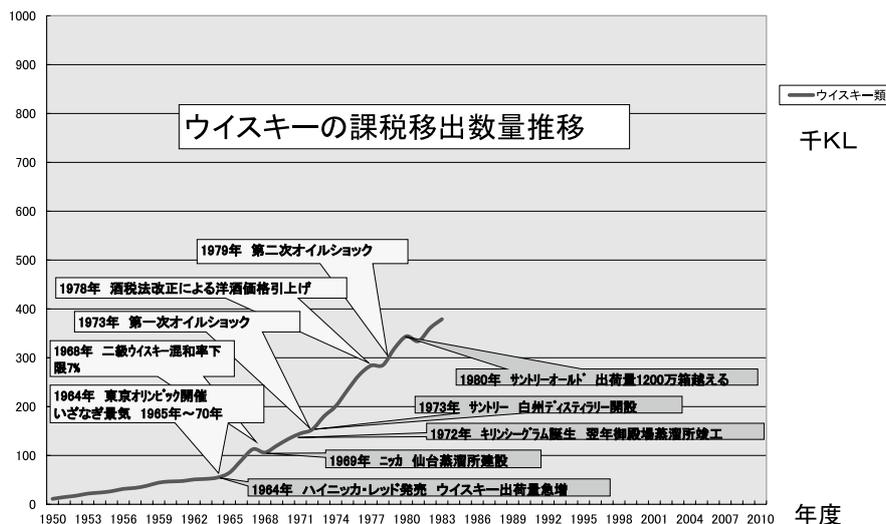


図1 ウイスキー課税移出数量推移 1983年まで

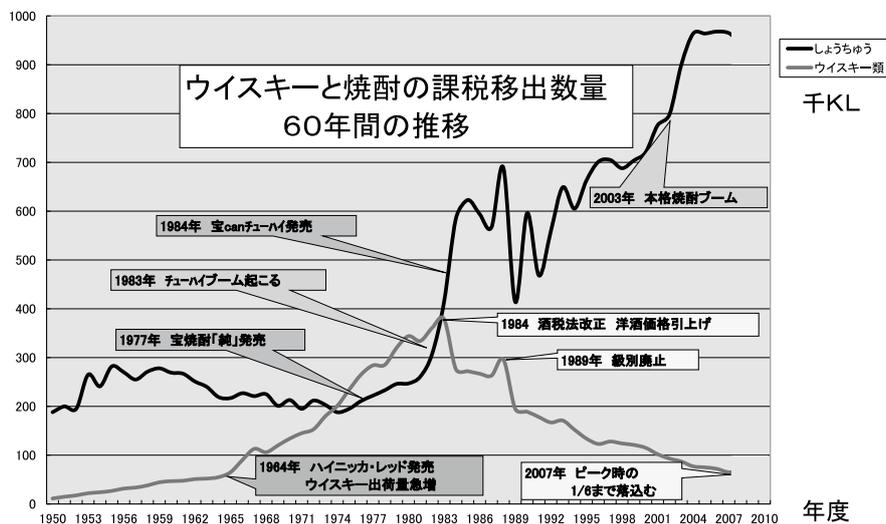


図2 ウイスキー課税移出数量推移 1984年以降

15. 日本ウイスキーの海外での認知とハイボールブーム

ウイスキー各社は生産量が減少する中でも、懸命に良い商品を出そうとした。そのような商品が海外で認知されるようになるのは2001年からであった。

2001年（平成13年）、当時唯一のウイスキー専門誌であった「ウイスキーマガジン」が主催する品評会で世界を驚かすことが起こった。世界のウイスキー専門家62人がブラインド——つまり商品が全くわからない状態にしてテイastingした結果、ニッカの「シングルカスク余市10年」が世界最高得点を獲得した。そして、2位をサントリーの「響21年」が取り、スコッチやバーボンの並みいる強豪を抑えて、日本のウイスキーが1位、2位を占めたのである¹²⁾。それ以降、日本のウイスキー

は数々の賞を受賞するようになり、日本のウイスキーは世界的に高く評価されるようになった。この高い評価を背景として、日本のウイスキーの欧米向け輸出数量は近年になり急激な増加を見せている。

そして国内では2008年（平成20年）秋頃から、サントリーがハイボールの提案を積極的に展開した。今までハイボールはウイスキーをただ炭酸で割ったものであったが、ハイボール専用のジョッキにレモンを絞って入れるという具体的な飲み方の提示を行った。また専用の高いガス圧を出せるサーバーも開発し「店でしか飲めないハイボール」も提案した。ニッカやキリンもハイボールにちなんだ製品を開発して、ハイボールは“古くて新しい飲み物”として受入れられた。その影響で、ウイスキー市場は20年ぶりに減少に歯止めがかかり、課税移出数量は2009年度から3年連続で上向いている。



図3 扉を開けてくれた人々（敬称略）

16. 日本ウイスキーの扉を開けた人々

2008年（平成20年）「ウイスキーマガジン」誌の10周年記念号に「The History Makers “ウイスキー産業に名を残した10人”」という特集記事があり、世界のウイスキー業界に影響を与えた10人が紹介されている。カフェ式蒸溜機を発明したイーニース・カフェヤ、ブレンディッドウイスキーを開発したアンドリュウ・アッシュャーなどの著名な方々の中で、ただ一人選ばれた日本人が竹鶴政孝であった。ウイスキーマガジンの記事には、「ひとりの男が、ひとつの産業を興すことなど出来るものなのだろうか？ 日本のウイスキーの父として知られる竹鶴政孝は、それを成し遂げたと断言することができる。」と書かれている¹³⁾。記事には「ひとりの男が…」と書かれていたが、政孝はこう言っている――。

「人生と運命の関係には二つの型があるのではないかと思う。一つは自分の運命に挑戦して生きていくにしても、ほとんど自分の力でその扉を切り開いていくタイプと、もう一つは周囲の好意や協力で自分の進む機会が与えられ、扉の方から、おのずと開いていくタイプのタイプであり、自分はどちらかというと後者の方に属するだろう」と。

スコットランド行きの扉を開いてくれた摂津酒造の阿部社長、スコッチの製造方法を教えてくれたグラント工場長、イネー博士、日本に最初のウイスキーを作ること力尽くした鳥井信治郎氏、株主の加賀正太郎氏、芝川又四郎氏、ニッカを支え、カフェ式蒸溜機導入を薦めてくれた山本為三郎氏、そして何より常に政孝を支え続

けたリタ夫人がいて、政孝はウイスキー造りに邁進できたのであろう。

あと、7年で日本のウイスキーは100周年を迎える。日本にウイスキーが根付いたのは、この人々がいたからこそであるということをご記憶に留めていただければ幸いである。

<参考文献>

- 1) 藤本義一「洋酒伝来」創元社 1975年
- 2) 土屋 守, 茂木健一郎, 輿水精一「ジャパニーズウイスキー」新潮社 2010年
- 3) 竹鶴政孝 日本のウイスキー 100年の歩み「洋酒技術研究十年の歩み」洋酒技術研究会編 1972年
- 4) サントリー株式会社日々新たに「サントリー 100年誌」(非売品) 1999年
- 5) O. チェックランド 「リタとウイスキー」日本経済評論社 1998年
- 6) 竹鶴政孝「ヒゲと勲章」ダイヤモンド社 1966年
- 7) 大阪時事新報 1931年
- 8) 杉森久英「美酒一代－鳥井信治郎伝－」毎日新聞社 1983年
- 9) 竹鶴政孝「ウイスキーと私」(非売品) ニッカウキスキー株式会社 1972年
- 10) 川又一英「ヒゲのウキスキー誕生す」新潮社 1985年
- 11) 久保俊彦 日本におけるウイスキー産業発展の経緯「弘前大学経済研究」第34号 2011年
- 12) WHISKY Magazine Issue16 May/June 2001
- 13) WHISKY Magazine JAPAN 10周年記念号 Issue76 March, April 2009

(2012年12月25日受付)